

【一般演題4】 第21席 「『難経集注』における呂注の位置について」

宮城 浦山 久嗣

『王翰林集注黄帝八十一難経』は北宋以前における『難経』の注釈の諸相を窺い得る殆ど唯一の資料であり、『難経集注』と通称されている。北宋以前の『難経』の注釈は呉（三国）の呂広の注に、唐初の楊玄操が改編重注したものが知られており、北宋中にはそれをもとに、丁徳用・虞庶・楊康侯が次々と注解を著した。それらはいずれも亡佚したが、『難経集注』にはこれら五家の注釈が選集されているのである。

『難経』は12,000字に満たない小品ながら、独取寸口脈診や奇経八脈などの原典として、中国医学史上、「黄帝内経」に準ずる地位を与えられており、各時代を通じて重要な役割を担ってきた。しかし、広く読まれてきた古典であるにもかかわらず、留保され続けてきた問題も少なくない。

同様に、『難経集注』にも不明な点が多い。従って『難経』の最も古い注釈と目される呂注の性格を検討してみることは、『難経』の伝来を解明するためにも、六朝期の医学思想を知るうえでも意義のあることと考える。

本発表の目的は、『難経集注』における呂注の分量や位置を概観することから始め、他の注釈や、同時代の医学書である『脈経』所引の『難経』部分との比較検討を通じて、これまで看過されてきた『難経』の一側面を浮き彫りにしようと試みるものである。